



〜元ヤン父ちゃんは愛息子のホモを治したい〜

父性「快」善クリニツク

目次

父性快善クリニック	快善前	五十五
父性快善クリニック	快善後	三

父性快善クリニツク 快善後

そんなじゃあ次は私の番ですか。

の宗介のことになります。

……いやはや、大変興味深いお話でした。

やはり皆さん、それぞれ御苦労なさってこのクリニックに来られとるんですね。

おぎかぜ、さくら。

どうも場違いじゃあねえかなと、最初はケツの座りが悪い気分だったんですが、なんだか安心しちまりました。

萩の月の萩に、風神の風。それから櫻は……旧字体で「さくら」です。

父親ってえのはみんな、見た目や年齢や職業関係なしに、誰でも悩んで苦しんでいるものなんですね。

……。

それでは早速始めさせていただきます。

私の名前は萩風櫻。職業は警察官をやっております。見ての通り、ちよつとばかり荒事の多いトコロです。

いやいや、皆さんここは笑っていただいて構わんところで。このナリで『サクラ』かって、学生時代から警察官の現在に至るまで、何度となく面白おかしくいじられまくってましたから。まあおかげさまで、何度転校しても名前と顔は一発で覚えられました。

さて、悩み事というのは、やはり私の……大事な一人息子

今回はどんな過ちや隠し事もすべて詳らかに語る……と、先生にはお約束しましたから白状しますが、この名前は意外と女受けてのも良くてですね。若いうちは散々やんち

やしました。とくに同級生と年上を中心に、いやあ今思い返すと恥ずかしいもんです。

え……どんなふう……？

いやあ馬鹿なもんですよ、「サクラちゃんってやつぱり体にサクラの入れ墨とかいれてるのー」なんて言われたら「いやあそうそうココらへんって、入れるとき痛くってよおー」ってな感じで体を触らせて、鍛えている部分をアピールしたりとかですね。

とか……いやあお恥ずかしい。思い返してみれば。元嫁との馴れ初め……というか、きっかけみてえなもんもこの名前でした。

若え頃は……いわゆるヤンキーなんて呼ばれるタイプの人間でしたから、親父になつてわかるんですが、あん時あ両親に迷惑かけっぱなしでした。

そんなわけで、親には感謝こそすれど、恨んだことはない……んですが、しかし実際自分の息子に名前を付ける段となると、やはりこう……男らしい名前にしてやりてえなつて考えちまうもんでしてね、そういうわけで、息子の名前は宗介といいます。

これが逆に、私とは違ってガキの頃から随分利口なやつでして、学校には勉強するために行く、家でもちゃんと机に向かう、ニュースなんかも好んで見る。そんなもんで、……まあ男手ひとつで育てたにしちゃあ……なんというか親馬鹿丸出しで照れくせえことなんです、とにかくよく出来たやつなんですよ。

私はこの通り……見たまんまの肉体派ですからね。そんな自分の腕つぶしや胸板に、フンツ……、この通りツ、自信はあります。男一人で息子を育てるために、とにかく

この体と時間を使える限り使ってきました。

しかしこう……息子が俺の知らねえ国の情勢なんかをへ

ラペラ喋りだしたことは、なかなか感動がありました。

こいつが警官になったら、さぞ立派なトコロまで行くに違いない。なんて、勝手に考えちまうくらいには、自慢の息子でした。もちろん息子には息子の人生があることは理解しています。息子に「警察官になれ」なんて言ったことありません。

ただね、ついつい考えちまうのが親父つてもんですね。

紺色の制服を着た息子は、さぞ立派なもんになるだろうな  
つて。

ガタイこそ俺ほどじゃありませんが、俺そつくりの目と、  
あの頭がありますからね。きつと立派に似合っていること

だろう。なんて、高校の制服を着ている息子の写真を見ながらしよつちゅう思っていました。

——ん、いやあ失敬。本題に戻ります。

さて、私の悩みですが……これは、息子の大学受験の頃から始まりました。

なんせ私と違って学のある奴ですから。好きなどころに行かせてやりてえつてのが親父心でしょう。しかし……、これがどうも……あいつに話を聞くとですね、「俺は国公立以外は受けない」なんて言いやがるんですよ。

そりゃあ正直ありがたい話です。それほど生活が楽つてことはありません。しかしね、こつちとしては端っから頼りにされてないような気がして、とっさに「馬鹿野郎お前一人好きな学校にぶち込むくらいわけねえんだよ！」……つて大声で叫んじまいました。

ほとんど喧嘩腰ですな。いやはや、なんともお恥ずかしい。

しかし、喧嘩腰にも理由があつてですね、普段だったら口喧嘩となるとだいたい俺のほうに負けちまうんですよ。

あいつは口も達者ですから。

ですがね、さすがに金の話を親父とするのは息子も気が引けたのか、息子はろくに口答えもせず、とつとと自分の部屋に引っ込んでいつちまいました。それが却つてよくなかつたんですよ。

男同士ぶつかり合わなかつたことで、なんかこう家の中が気まずい雰囲気になつちまいましたね……。

息子は頭の出来はともかく、性分となると俺に似て頑固者でして、結局偏差値の一つも二つ上の場所ばかり目指して一日中机に齧りつく生活を始めやがりました。

いやあ男として上を目指すのはもちろんいいことですけどねえ。それにしたつて一年以上ずーっとピリピリして勉強続けるなんて、俺からしたらとてもマトモなものにみえなくつてですね。

息子は意地になつてるし、かといって今すぐやめろ、なんて言うわけにもいかねえし、精のつくもんでもつて夜食用意してやっても、腹にもたれるだのなんだの言いやがる始末でね。俺あすつかり参つちまつたんですね。

。

そこでお世話になつたのが、このクリニックでした。

私のような不器用な親父には、まさに天の助け。本当にありがたい手助けをいただきました。先生には感謝してもしきれません。

ええ、ほんとうに、みなさんと同じ気持ちです。

私はクリニックに行つて気がついたんです

息子が苛立っているなら、頭に登つた血をちよつとばかり下ろしてやればいい、つてわかつたんです。

男だったら簡単で、そのうえ気持ちいい、最高の手段がある。

ええ、簡単なことです。

ある日、私は息子の部屋で、机にかじりついている息子に親父としての愛情をたつぷりと込めて肩を揉んでやりました。

「まあまあ、俺のテクにまかせておけつて」

私はそう言つて、そのまんま固くなつた体を触つていつて、一番気持ちいい場所をガシツと揉んでやりました。

いやあ、息子は驚いておりました。

今にして思えば、ちよつと急でしたね。夕飯のときにでも「今日は俺がいいことしてやるぞ」くらい言つておいてもよかつたかもしれません。

とにかく最初は反抗的に「なんだよ親父、なにやつてんだよ」なんて言つてきた息子も、ちよつと続けているうちに、「ごくつとツバを飲んで俺の顔をじつと見て……おとなしくなりました。」

そう、そのまんま俺は、息子の溜まつたチンポをシゴいてやつたんです。

なんせ独り身の親父つてのは、家庭のためにシコシコ一人でチンポをシユるものですからね。つまりオナテクが絶品

つてわけです。

息子は私の二の腕を掴んできて、目をかっぴらいて見ていました。

そうしていると、むくむくと息子のムスコがデカくなってきました。「おいおい、なかなかご立派になったじゃねえか」なんて俺が言うと、さらにムクツとでかくなりました。息子は賢いやつですが、ココはどうしようもなく男だったことですね。これまた親バカのうえに手前味噌なことなんです、ズルつと皮が剥けたあとの勇ましさは随分と俺に似てました。

そのうちトローつと先走りがでてきました。

お、こりゃあ童貞だな。なんて思いつつ、俺はシコシコと息子のチンポ……おつと失礼、息子のナニを抜いてやりま

した。俺が気持ちいいと感じる動きをそのまんまコピーしてやると、やつぱり親子ですな、息子は俺に体を預けて「うっ……！」なんて声を上げてよがりました。それを続けてやっていると、どんどん息子の下半身が揺れてきます。

「おつ、出そうか？ 出そうだろ？」  
俺が聞いてやると、息子は静かに頭をコクコクとさせました。

「よし、出せ、俺の手の中に出しちまえ」  
そう言つて、俺は手をすばやく動かして息子のナニを擦りまくつてやりました。

「ああ……ううッ……！！」

息子がそう言うと同時に、俺の手の中にドロつと熱いものが出てきました。

自分以外の雄汁つてのを初めて触りましたが、ありやあな

かなか妙な感じですね。

俺はたっぷりでた息子に「よしよし、随分出たな」と言っ  
てやって、しごいてなかった方の手で肩をポンポンと叩い  
て讚えてやりました。

とまあ、こんな感じでたまに息子のストレス解消を手伝っ  
てやって、息子の受験を応援してました。

私の悩み……ってことで話し始めましたが、失礼しました  
……ココはもう解決済みの問題ですね。  
なんせその後息子は、無事合格もしましたから。

合格発表がネットに上がったときは、部屋から飛び出して

きやがってね。あんなにツンケンしてたくせに、嬉しそー  
に俺に報告してきやがってですね。

一年間……、なんせ一年間ですからね。

俺もすっかり舞い上がって、思わず万歳三唱です。息子の  
やつは恥ずかしいからやめろって言ってましたけど、これ  
が祝わずにはいられるかってんで、息子を抱きしめて褒め  
てやりました。

でもあの顔は嬉しそうで……。

そう、だから今にして思えばあの一年の苦労なんて、なん  
でもねえんですよ。一番頑張って、苦しんでいたのは息子  
なんですから。

当時はそりゃあむかつ腹立ったもんっすけどね。ただ、あ  
いつには俺しかいないって思うと、短気な俺でも堪えるこ

とができました。

俺はあいつの親父。それが心の支えでした。

あの女に対する恨みを忘れられたのも息子のおかげ。遊びを我慢する忍耐をくれたのも息子のおかげ。そりゃあいいことばかりじゃあなかったですが、俺の今の人生が親父として、警察官として、男として納得できているのは、息子の存在あってこそなんです。

——ところが問題は、あいつが大学に入った後です。

必死こいて勉強してた反動っていうんですかね、どうにも息子が遊び歩くようになりましてね。

や、私もね、そんな小せえことをいいたくはないんつすよ。あいつも男だ、自分の人生を自分で決める権利がある。

ようやく自由になったんなら、その分楽しんだっていい。

いやね、しかしね、昔の自分を思い出すとどーーしても止めたくなるんつすよ。

俺あ間違いない、あの時が一番ロクでなしだった！

ま、また大声出しちまいました、失礼。

とにかく、息子がまるつきり私みたいになるとはおもっちゃいけないつすがね、でも……息子の方は大丈夫でも妙な女に引っかかるかもしれねえって思うと……。やっぱり親父としちやあ心配なわけです。

それにしたって極端なんですよ。

やれ新歓だ、合コンだ、大学近くに住んでるやつの家泊まりだつて、高校時代にもそんなことはなかったのに。まあ、どこに行くにもいちいち報告残していくあたり、根っこつから遊び人になったつてわけじゃあねえんですけど

ね。

しかしね、いくらなんでも、大学つてえのはそんなに浮ついたとこなのかつて、

息子の頭でもつてあんなに勉強して入れるようなとこなのに、そんなにやることばかり考えたやつばつかなのか——つてえことになりますわなそりゃ。

しかしまあ、いままで勉強と男連中とだけつるんできた息子ですからね、どうも成果はでなかったみたいでしてね、毎日リビングに来ちゃあ、溜息ついたり、俺に愚痴ったりしてましたよ。

そうなると今度はまた逆に、親父としてアドバイスのひとつでもしてやりたくなるもんです。

なんせそつちは……あんまり自慢することじゃあねえで

すが、私の得意分野でしたから。

私は何度か息子に必勝法をくれてやりました。

「とにかく自信のあるところを見せろ」「話題の数は多めに用意しとけ」「だが絶対相手に語らせろ」「スケベ心を出していい相手は限られる、見極めろ」そんなようなことを、あいつが落ち込むたびに言つてやりました。

——。

この時、息子はどんな気分だったんでしようなあ。

クリニックで目を開かされた今だから、こうして息子の気持ちを考えてたり、心痛めたりできるようになりましたが、当時の私はまるで駄目な親父でした。

思い出すと恥ずかしくなっちゃうくらいです。

そんな駄目な親父ですらかね、息子が震えるように顔をうつむいているのも、そんなにこつ恥ずかしい失敗をしたのか……程度にしか思っていないませんでした。

「今日は晩酌の気分でもねえな……さて、っと」

私は笑顔を引っ込めて息子の隣にケツをつけました。そのまま何を言うでもなく、湯呑に入れた冷えた茶を飲んで待ちました。

言葉を引き出すには、聞き出すよりも隣にいてやること。ま、これも若いうちに覚えておいたテクニクですね。

……。

しかし、息子は口を閉じたまんま何も言いやしません。ここまで無口な息子は初めてみました。

「——俺にも言えないことか？」

私は自分から息子に聞きました。

「親父だから言えないことだ」

息子は顔も見せずに、こう答えました。

……。

このクリニクに集まった方々ですし、これ以上勿体ぶつてもしょうがねえですね。

そうなんです、うちの息子も、そうなんです。

俺のことを男としてみていた……って言ったらいんす

かね、なんかこう、とにかく……。息子が興奮して、オカズにして、執着しているのは、親父の俺だって言うんです。

大学でぱつと会ったオンナでもなく、合コンにいる特上のオンナでもなく、男の……しかも俺だって話なんです。

息子は、ホモだったんです。

そこから……一度話し出してからは、俺が口を挟む暇もなく、そりゃあもう堰を切ったように喋りだしました。

とにかくずっと隠していたこと。

大学にまで行って色々試せば、世界が広がれば、自分の気が誤解かなにかだったって思うかもしれないって思ったこと。

親父が急に自分のナニを触るようになってきて、疑惑が確信に変わっちゃったこと。

他の相手でも本番直前まで行ったけれど、やっぱり駄目で……ずいぶん失望されたこと。

男相手でも、俺以外じゃ駄目だったこと。

俺は横で聞きながら、呆然として固まっていた。

息子がしゃべくりまくっているから……ってのもありましたが、何を言ったらいいんだかまるつきりわからねえ……ってのが本心でした。

だって、俺の息子……俺が育てた……男なんですよ。

それが、ドラマやニュースやバラエティにでているようなホモだっていうんです。いきなり、突然、なんの前触れもなく。

冗談にしか思えませんでした。

だって、息子はどっからどう見ても普通の男なんつすよ。（ホモっていうのは治るもんなのか）（俺の育て方が間違っていたのか）（こんな出来た息子がまさか）

そんなことを考えている俺の頭ン中を読むみたいに、息子

は……「親父は悪くない、悪いのは俺なんだ」なんて言うていました。

待てよ、悪いとか悪くねえとかそんな問題じゃねえだろ。

……なんてことも言えずに、黙っている俺に背を向けて息子は部屋に引っ込んでしまいました。

俺の後悔はすぐにやってきました。

情けねえじゃあねえですか。

俺あ、大事な一人息子の悩みも、まるでわかっちゃいなかった。男として、親父として、畜生なんだどうしようもねえじゃねえかって……。

考えてみりゃ、大学合格にはしゃいで息子を抱きしめたあの時も、あいつの方からすぐに離れていったな……って。

私は……頭のどつかで、息子の将来を勝手に思い描いていたってことに気が付きました。

アイツは将来俺と同じ警官になるんじゃないやねえかって。そんな夢です。

もちろんキャリアです。

息子はちよつとばかり意地っ張りですが、そのぶん責任感も集中力もあります。人の上にたつ素質つてのがあるヤツです。何より賢い。

俺よりずっと偉くなつて、親父のやり方はもう古いなんて生意気言うようになって……。

そんな事を、はつきり口に出さずともなんとなく考えていました。

息子がホモなら、俺はどうすりゃいいんだ。  
呆然としました。相談できる相手もいねえ。

いや失礼。

ちよつと水を飲まさせてもらいます。

……………。

さて……それで俺がどうしたかっていうと……。

まあ正直なはなし、暫くの間はなんもできませんでした。

どう接すりゃいいのかわからなかったんです。

アイツが「この前のは冗談だ」って言うてくれるのを待つ

てたくらいのもんでした。

気まずいのが部屋と大学の往復ばかりになって、受験期のピリピリしていたときよりずっと厄介でした。

俺は息子のためにできることはねえのか。

俺が……俺がどうすりゃ、息子のホモを治せるのかって……。

息子のいない間に、俺は息子の部屋に入ってみました。

普通の男の部屋です。

テレビがあつて、映画のポスターが貼つてあつて、ゲーム機があつて、デカイベッドがあつて。このベッドは昔の嫁といっしょに、将来どうせ必要だからってデカイのを買ったもんでした。

男はすぐにデカくなる。ましてや俺の子供なんだから、シ

シングルサイズじゃ絶対足りなくなるって言うてね。

俺はそんなベッドに横になって、考えました。

息子はいつもここに寝て、朝起きて、たまに抜いて……つてしているわけです。

横のくずかごを見てみると、丸まったティッシュが結構な量で放り込まれてました。

ただ、アイツの言葉が本当なら、ひとりでシコっている間もアイツは男の事を考えているってことになります。

まったく俺にはわからない世界でした。

いやそういう人間がいるのは勝手ですけどね、まさか自分の息子が……。

俺は部屋を見回してみました。

なんの変哲もない部屋です。ホモの部屋がどうかなんてまったくわからない。ピンク色なんて見えねえし、フリルだとかありません。

息子の部屋に大きめの姿見があるのが見えました。

この鏡でいつも服を決めてるんだな。

そう思いながら、俺は自分の姿を見ってみました。

ごつい体のマル暴の刑事。舐められたら終わりの職業ですからね、髭や髪の毛はいつだつて気を使つてました。

鏡の向こうにいるのは男臭い顔です。

俺が息子のためにできることはなんだ。

俺のゴツく鍛え上げた体。

鏡の向こうから話しかけてる野郎がいました。

俺は息子の部屋で服を一枚づつ脱ぎ捨ててみました。

『お前が息子を愛しているってのは、口先だけか』

分厚い胸板。割れた腹筋。ぶつとい二の腕。筋肉で膨れた

『すべて息子のためだった。この筋肉の膨らみ一つ残らず、

太もも。

家族への愛の象徴だ』

長年鍛え続けた体に、雄のホルモンがたつぷり通った体毛。

『全部、全部任せておけ、父ちゃんに任せておけよ、なあ

そして、息子を作ったこのチンポ。

………』

鏡の向こうの素っ裸の俺が言ってきました。

そうです、このクリニックで救われた記憶が、そこで蘇ってきたんです。

息子を助けてやれ。救ってやれ。お前は親父なんだ。

俺ががむしやらに働いてきたのは、とにかく息子を一人で育てるためでした。この体も、髭も、チンポも、全部全部

………。

その為です。これを使って、息子をまっとうな男にするんだって、決意を新たにしました。

いや、本当にこのクリニックには感謝しかありません。

ここで俺は決意し、そして考えました。

よつと。

息子を救う作戦。

俺の体を活かした計画。

俺だからできる、ホモの治療法です。

――

その日から数日、私は息子のためにあれこれと準備をはじめました。

それが……この格好です。

ちよつと失礼。



……。

巻を啜えて、息子の前に立ちました。

「なんのつもりなんだよ親父」

息子はほとんど震えているみたいいな声で俺に言いました。

ふう、いやはや、これも随分お世話になりましたが、この

格好つてのはなかなか気が引き締まりますな。

いいもんですな六尺つてのは。

そう、俺の計画はこうです。

「おい、宗介」

そう呼んだ俺を見て、息子は自分のベッドに腰掛けたまま、口をあんぐりさせていました。

「どうだこいつぁ」

俺の格好は、ネットで買った禪に、サングラス、口には葉

「これが男つてもんだ、見てみる」

俺はそう言いながら、ぐつと力こぶを作つて見せ付けました。この格好は俺流の、対軟弱コスチュームです。とにかく俺の知っている、男らしいつてもんを全部自分の体に詰め込みました。

「どうだ、どこもかしこもガツチガチに固そうだろ、女とはぜんぜん違うんだ」

俺は座る息子の前で仁王立ちしました。

「だからな、女と違うからな、触つても楽しいもんじゃねえし、気持ちいいもんでもねえんだぞ、どうだ、わかるか？」

そう、ちようどこんなふうには、見せつけるようにして立ちました。股間がちようど息子の顔の真ん前に来てましたね。これを見せてやりやあ、息子の勘違いも晴れるだろうって思ったわけです。男を感じさせまくれば、息子はきっと萎えちまうと思ったんです。

「ん、どうだ、触ってみるか」

俺は息子に聞きました。

なんせ実際の人間が、男の見本って格好をしていますからね。それなら実際触らせてみて、指で肌で感じさせりやあ、自ずと答えは出るだろうって推察するのは当然でしょう。

「ほれ、遠慮するな」「親子でいまさら躊躇うことなんてねえだろ」「お前の体なんて、触ってねえところはねえんだぞ」

俺はそう言つて、無理やり息子の手を掴んで自分の太腿に押し当てました。

ピタツと俺の内腿に、男のゴツゴツした手の感触がありました。息子の手じゃなきやあ、思わず身を引くような感覚です。これが男同士ってことだ、きつと息子もわかってくるはずだ。ダメ押しに俺は言いました。

「これだけじゃねえぞ、力を入れると……フツ！ どうだ一気に固くなって形も変わっただろ、この脚でもって、ろくでもねえ半社会勢力を追っかけて来たんだぜ」

息子は手を当てながら、ゆっくり立ち上がってきました。そのまま、今度は自分の意志で俺の胸板に……余った手を当ててきました。

「どうだ、毛まで生えてるだろ、男つてのはこういうもんだ、いわゆるおっぱいとは大違いの……ンッ……」

ところがね、息子はなんと、俺の胸板を揉み始めたんです。太腿は撫でてくるし、息は荒いし、試すにしても、なかなか本気の触り方です。

やっぱり男の本能として、こういう動きになるんだな。そう思いました。

「ど、どうだ……わかるか、男の体だ」

女々しきなんてまったくなしに、男らしい助平な手の使い方です。思わず俺のほうか、なんとというか妙な気持ちになつちまうほどです。

ああこりゃあ、女遊びに走らないのは正解だったな、なんて事を考えました。

息子のこのテクがありや、大抵の女は……。息子はそのま  
ま俺の腹筋や、脇腹や、二の腕を触りだしました。

「親父、すげえ体だ……ほんとに、ほんとに……親父の体だ」

「お、おうう……ここはなかなか女と違うところだろ、どうだ、しっかり割れてるだろ」

息子の手付きは、優しいかと思えば突然大胆になったり、かと思えばまた指先で筋肉を撫でるだけになったり。

ヘソのあたりなんかは、かなりキク刺激でした。

いやあ待て待てと、男の体を触って楽しいなんてことはねえ。

きつとそのうちわかる。触つてりゃあわかるはずだ。こんなに雄らしい俺に、男っぽい触り方をしている息子だ。ホモってるわけがねえって思いました。

「ここなんて、どうやってこんな太くなつたんだ。すげえ

ガツチガチだ」

「あ、ああ……小せえ筋肉つてのはなかなか面倒なんだよ」

「へえ、親父、ここ触られるの好きか？」

「わ、わからねえよ……もう何年も……俺あ……」

「そうか、わかんねえのか、じゃあ……俺が初めてかもな」

そう言つて息子は俺の首筋を舐めてきました。

体にビリつと、ぬるつと、痺れるような刺激が来ました。

どういうことだつて焦り始めたのはココらへんです。ちつとも気持ち悪いだの、固くてつまらんだの言つてきやがらないんです。

そこで俺は気が付きました。計画ミスです。息子の性格の良さつてのを計算に入れてなかった俺の落ち度だと気が付きました。

息子に対して、気持ち悪いだとか、いやだとか、言っ

てくるわけないんです。

しかし、こうなったら俺も意地です。

なんとか息子に、男の体をわからせて、治してやらねえと決意しました。

「ここはどうだ、触ってみるか」

そう言つて俺あ腰を、こうやって突き出しました。

そう、股間の膨らみを……いま皆さんにしているみてえに見せ付けたんです。

息子は俺の顔を見てきました。

ここは一番、女にない場所ですからね。

さあココを触るのは、いくら宗介のやつでも躊躇うだろう。俺は得意げに片眉を吊り上げました。

「ン？ どうなんだ、いいんだぞ触って」

ようやく効き目があったんで、俺は喜んで腰を揺すって見せました。

「なかなかデケえからな、しかも慣れねえ禪でちよつとばかり蒸れちまつてるから臭いもあるぞ、どうだこれ——ン オッ!？」

俺は妙ちくりんな声を上げちまいました。

なんせ息子のやつ、迷わず挿んできたんです。

俺に似て大胆で力強いやつなんだな、つて……今なら冷静に思いますが……当時とはとにかく愕然としました。

「おい、あ、ま、待てよおい」

「親父が触れって言っただろ」

「そ、そりゃあそうだが」

「男が一度言ったこと曲げるなって、いつも言ってるじゃないか」

息子は俺のブツをもみながら、俺の背中に手を回してきました。

抱きかかえるみたいにして、ゆっくり俺の竿が収まった股間を……こう……こうやって片手で揉んできます。

他人の刺激は正直なかなかに久しぶりで、俺の愚息はどんどん……息子に触られているっていうのに、男にやられてるつてのに、気持ちよくなつてきちまいました。

「で、でもどうだ、ほら、穴もなんもねえところだぞ、つまらねえだろ」

「ちつとも」

息子は引きません。

それどころか、息子のガチガチになった竿が、ズボンの上から俺の六尺の前を擦り始めたんです。

「い、いくらそこに擦りつけていても……突っ込む場所なんてねえんだぞ……。ほら、固くなってきちゃったじゃねえか、こんなもん同士……。こすり合わせたってちつとも……あつ、んお……。なき、気持ちよくなんて、ねえ、だろ？な？」

「すげえ、興奮して気持ちいい」

「うッ……ハア……ハア……俺の竿で、か」

「ああ、親父ので気持ちよくなってる俺」

こんなに男らしい格好をしている親父相手に、息子は興奮してるんです。

ホモの根つてのは、想像以上に深いんだと俺は理解しました。

しかしここで逃げ出すような、男らしくない真似をして……情けない背中を見せたら、息子のホモはますます深刻になっちゃいます。

俺は逃げずに、息子の部屋で……。息子と絡み続けました。

正直もう気持ちよすぎて、脚の力が抜けてきちゃいました。俺あ若い頃にはそれこそ何発も一晩にやるくらいでしたけど、親父になってから我慢し続けて……。他人の刺激なんてめちゃくちゃ久しぶりなんです。

しかも息子は、俺がココは弱いって反応すると確実にそこばっかり責め立ててくるんです。

「ここ弱いんだぞ、親父って。わかる？」

「そ、そんなこと……。ねえぞッ……」

「嘘だつて、ほら、チンポがびくつてなってる」

「ああ……。クソつ、しよ、しょうがねえだろ、それは……」

「なんでしようがないんだよ？」

「な、なんでって……そりゃあ……」

「そりゃあ？」

「き、気持ちいい、から……しようがねえだろ……ッ」

そんなこと言われると、ますます下半身からドロっとした気持ちよさがこみ上げてきちまいます。男らしいこの俺が、触られて、責められて、言いようにされてるってのが、なんかこう感じたことのない気持ちよさで……ありゃあやバかったです。

「親父、もういいだろ、チンポだすぞ、こっから出すぞ」

「ま、まてって、直は……ヤバイ……」

「散々俺の触ってきたじゃねえか、拒否権なんてないぞ、不公平だ」

息子は有無を言わせず、六尺から俺のチンポを取り出そうとしてきました。

俺は焦りました。ナニがまずいって、竿にはまだ……皮が……勃起しても亀頭に絡みついている俺の皮が残ってるんです。

銭湯や着替えのときも、いつも剥いてから取り出しているつてのに……、それを息子の手で直に取り出されて、見られるなんて……。考えただけでも。

ああ、いや、違うんです。この俺の包茎チンポは、本来は誇るべきものなんです。

なんせ俺の皮が延びまくったのは、息子の為を思って……女も抱かずに、仕事と家庭のために……一人でシコシコオナリまくってたからです。



つまりこの皮が延びている長さはそのまま、俺の家族への愛の象徴なんです。

……しかし、その愛情を息子に直に見られるのは……照れくせえじゃねえですか。

そ、そういう理由で俺は焦ったんです。

ところがね、息子はまた勘違いしちゃいましたね、俺が包茎を恥ずかしがっているって、そう解釈したんです。

「へえ、親父って……包茎なんだ」

「ほ、包茎呼ばわりするんじゃないやねえ。こりやあ、た、ただの包茎じゃねえんだぞ……いいか、まずだな——」

「——俺、親父と……ここは似なかつたんだな」

俺の言葉も聞かずに、息子はズボンから自分の竿を取り出しました。

現れた見事にズルムケのチンポが、俺の半ムケのチンポめがけて突っ込んで来ました。そして、皮の仲間で潜り込んできやがりました。

「うっ……!!?」

ずるっ……つと、生温かいチンポ同士がくつつきました。お互い先走りまみれの鈴口同士が重なって、ますます汁が溢れてくるのを感じちまいました。男同士グチュグチュとこするっていうホモすぎることをやっちゃまって……でも、ありやあ……どうしようもなく気持ちよかったです。言い訳できねえくらい、今思い返すだけでも、こうやってチンポが反応しちゃいます。

「あつ、そ、それまずい……ああ……こすりつけやべエって……!」

「ハア、ハア……ああ、すげえ、親父の……親父のだ……！！！」

そこから、なんか……会話にならねえ言葉をお互い言い合いながら、グチュグチュと……声の代わりにデカイ音を竿同士……男の象徴同士で鳴らしてました。

俺はそこでようやく気が付きました。

そう、息子はホモだけど女っぽくはないんです。つまり、俺のことを責めれるってことが楽しいんです。

ほら、ガキの頃やりませんでしたか。

息子とのごっこ遊び。戦いのマネごと。

大人と子供の体格差があっても、まいったかーつつつても、全然降参しねえ。

あれです。きつとあれなんです。

しかし、そうなると困ったことになるのは俺の方です。

これじゃあ息子のホモが収まるどころか、男相手に射精したってハクをつけちまいます。

「か、勘弁しろって、まて、まてよお……ま、待てつて……」

俺は息子を案じてそう言ったんですがね、息子はどうも俺が参っちゃまっていると勘違いしたのか、ますます嬉しそうに腰を突き出して来やがりました。

俺の髭に口を近づけて「出そうなん？」なんて、生意気に聞いてくるんです。

いやほんとに、生意気なやつです。

……。

しかし、まあ……その時の俺はもうクラックラになっちゃま

つてて……。考えもなしに、口が勝手に返事しちまってました。つまり、おもわず「出そうだ」って返しちまったんです。

正直もう……。チンポから出したい気持ちしかなかったんですわ。ジワジワした気持ちよさがずーっと続くと……。射精してえって考えで脳みそがいっぱいになっちゃうんです。ハンパな気持ちよさじゃなくって、最後までやりたい。竿をたっぷり扱いて、皮も使いまくって亀頭をコスコスして、腰も前後に振って、白いのを前にぶっ放したい。

男ならわかりますよね、射精してスッキリしたくなるあの感覚。アレを味わいてえって考えで頭が一杯になっちゃういました。

息子は俺のナニじゃあなくって、手を握ってきました。

そうしてそのまま、最初に俺がしたみたいに手を引つ張って……。息子のチンポを握らせてきました。

射精寸前で脈打っているナニです。今までも触って、シゴいて、抜いてきてやったはずなのに、まるで初めて触ったみたいな感触でした。竿の長さや硬さや反り具合、どれも似ているようで違う息子のチンポ。……。俺が握ってやると、返事をするみたいにアイツは俺の竿を握ってきやがりました。

そのまま、皮を剥いて、また閉じて……。

俺が一番気持ちいいやり方を、知ってるかのように激しく強くやってきました。

しかしね、俺もいつまでも負けちゃあいられません。息子のチンポを俺なりに最大限のテクで責めてやりました。

「やべえ、気持ちよすぎる」

耳元で息子が言うのがわかりました。

正直全く同じ気持ちでした。しかし素直に認めるのは癪だったんで、俺は……「そうか、そうだろうな」って答えてやりました。

俺ももう、いついつでもおかしくなかつたんですが、息子より先に出しちまうのは……勘弁って感じで、必死にケツ穴を引き締めて我慢してました。

グチュグチュって感じの音を立てながら、親子二人、男同士でチンポを扱き合いました。

他にはナニも考えず、お互いの竿を扱くことだけやってました。

どんどんお互い汗だくになって、気持ちよくなって、ついに息子が叫びました。

「——ああ、出そうだツツ!!」

その瞬間、やつとイける。そう思っちゃいました。

俺あ油断しちゃいました。つまり、その……息子が出すほんのちよつと前に「おうう……ツツ!」つと声を上げてイツちまつたんです。

ドローつと白いのが出ました。

息子の男らしさと柔らかさが混じった手に、大量に吐き出しちゃいました。ああーこの手気持ちよすぎる、この手好きだあーって考えて、なんべんも腰を振りました。アホみたいに腰振りしました。

いやあハッハッハ、なんでも話せとお約束させていただいたんですが、こりやあまた、こつ恥ずかしいもんですなあ。私の……こつちのほうの愚息もうっかり興奮しちゃってます。

ちよつとばかり休憩に、便所に行かせて貰っていいですかね？



さて、どこまでお話しましたか。

私の悩み事のお話ですが、そうそう、息子のホモが……俺の想像していたのとは違っていたってところまでですね。

そこからは何度、私がいくらホモを治してやるためだつて言つても息子は笑うだけで、全然本気にしやがらなくなりました。

まあ、家庭内の雰囲気は随分良くなったんですがね。それまでの冷え切った雰囲気はなくなつて、むしろ……たまに体を触ってくるようにまでなりましたからね、息子の宗介は。

しかしこれは問題です。

私は息子のホモを治してやらねえとつて考えているのに、

息子はどんどん俺のケツを狙ってくるようになってるんですからね。どうも完全に雄として目を覚ましちまったようで、事あるごとに私に対して甘ったるい言葉だとか、挑発的な態度とか、いろんな手段で……俺を……私を落としかかっけてきました。

私はそのたびに息子と話し合いました。

このままの生活していたら、息子が子作りも出来ない男になつちまうつてことですからね。

お前の遺伝子が残らないぞ、結婚生活はともかく、子供つてのはいいもんだぞと、ね。

しかし息子は言うんです。

「親父じゃなきやあ意味がない」

「一時の気の迷いじゃない」

「ますます気持ちが強くなっている」

……。

若いってのはどうしてああも、情熱的なんでしょうね。

その場限りの口から出まかせじゃない言葉ってのは、なかなかどうして……男相手だつてわかつてても胸に来ます。

俺はそういう言葉をくらうたびに「馬鹿野郎」なんていつて口をふさいでやりました。

——ああ、キスはこのときにはしてましたね。

まあほら、男同士つつつても、海外じゃあ挨拶じゃあないつすか、そんな大層なことじゃないし、こうしてやるとひとまず息子もおとなしくなるんでね。

とにかく問題は息子のホモです。

いろんな格好を見せても、息子は喜ぶばかりで、どんなに男らしい姿を見せてもひるんじやあくれません。

変わったことと言えば、六尺がすっかり気に入って常用するようになった程度ですかね……。

これもまあ息子が喜ぶんですが、まったく困ったやつです。

とにかく息子の宗介は、俺の心と体をじっくり時間かけてほぐして来やがりました。

終いには、

「親父は鏡の前で触られるの好きだろ」  
なんて、誤解までしていましたからね。

俺は鏡の前に立つとちよつと気合が入っちゃうってだけで、そうじゃねえんだと言っても息子は聞きません。クリニクの話は……外では絶対言つてはいけないと先生に言

われていきますからね、

ていきました。

しかし、そういう生活を何ヶ月か続けていると、……確かに恥ずかしい思いをしましたかね。息子のことがよくわかってきました。

息子は男なんです。ホモってのは女になりたい人間だけじゃあないってわかりました。

つまり、息子に雄を見せつけるんじゃないかって、息子の中の雄を引き出してやりやあいってことに、俺は気がついてたんです。

そうすりゃあきつと、俺みたいなゴツくて髭の生えた親父より、女を抱きたくなるにキマっています。

男を磨いてやる。

まあ文字通り、息子のムスコを磨いてやるって方向に変え

腰の使い方はどうだ。

抱きかかえる力強さが足りねえ。

キスってのはただ口と口くつつけるだけじゃあねんだぞ。とまあ、口説き方を教えたときみたいにあれこれ教えてやりました。

いや、実際に俺を抱かせているわけじゃありませんよ。俺はホモじゃないんでね。息子のためにケツのやり方は学びましたが、ホモじゃあないんでそれとこれとは話が別です。

俺の手筒に突っ込ませるとか、素股させるとか、色々な手段で試してみました。何度も何度もやりました。

回数をこなせば、……って思ったんですがね……。

しかしどうにも駄目なんです。ちつとも効き目がありません。

息子のホモってのは、一体どうなってるだろうって……

すっかり答えがわからなくなっちゃいました。

……そこで俺はまた気が付きました。

俺はそもそも、ホモってものを知らなすぎるんだって。

鏡を見れば一目瞭然です。なんせ鏡にいるのは、いかにも男って感じの私、荻風櫻なんです。

ホモと縁遠い生活と性格が長すぎて、息子の気持ちを理解できてねえんです。一度こう……男が好きって気分を味わって見たらわかるんじゃないか。って、考えました。

これは最も安全で確実な策です。

なんせ、俺はホモにはなりえないですからね。ちよつとばかり気分を味わっても、すぐに治るに決まっています。その治った経緯を息子に語ってやりやあいんだと、そう考えました。

ココまでの話でもう皆さんおわかりでしょうが、俺はとにかく行動に移すのが早い人間です。

この策もとある組織のガサ入れ中に思いついたんですがね、さっそくそこでケツ穴弄る道具を……携帯つかって注文して、次の休みに実行しました。

ホモってのは、つまりケツが感じる男です。そこで気持ちよくなれば、きっとホモの気分がわかるだろうってことでね、俺は自分のケツをいじり始めました。

家で一番でかい、息子の部屋の鏡をつかってみました。実

際に入れてみようとすると、これが正直結構躊躇うもんですね。

しかし鏡を見て『お前はアイツの親父だ』『縮こまつてる場合じゃねえだろう』って自分を鼓舞してやりました。

……。

しかしまあ、一つ失敗したのは、息子の帰宅が思った以上に早かったことですね。

当然息子は帰ってきたら、自分の部屋に入ってきます。

俺がケツを弄っている真つ最中に、息子が扉を開けました。

もちろん俺は慌てて事情を説明しました。

「これは、お前のホモを治すためなんだ」「俺も一回ホモ

になって、そのあと治してやろうと思つてな」

とまあ、そう言っている途中だったのに、息子のヤツは俺に覆いかぶさってきてやがりました。

「さて、さてさて、早合点すんじゃないえ」

ほとんど強引に勃起したナニが、俺の突き出たデカイケツにひつついてきました。

竿の裏筋がざりざりと、ケツ穴のあたりを突いてきます。

これまでどれだけ我慢してたか、こんなことしているってことは誘つてるんだよな、いいってことだよな？

息子は俺に似てせっかちですが、俺に比べりゃ……なんと……いか品が良いですからね、こんな体勢になっても俺に……

……親父に伺い立てるようなことを聞いてきました。

もうこうなっちゃったら、多分収まりが聞かねえだろう。

親子ですからね、息子の気持ちはよくわかりました。

私は覚悟を決めました。

……どう断ったかって？

「いいか、ゆっくりやれよ、ちよつとでも下手だったら……  
……そこで終わりだからな」

私がそう言うと、息子は、

いやあ、それがね、現場にいりやあわかると思うんですが、

「あ、ああ、わかった。大丈夫。やる、やるよ」

無理でしたね。

と答えました。

なだめきれませんでしたよ。

息子は完全に火がついていました。

本番ができる、ってなると……そこはやっぱり童貞ですな。

私の腰を掴んで、ギラギラした目で見ているのを見ていました。焦りましたが、これはチャンスだと思いましたね。

宗介のやつは緊張した顔で頷きました。そこを笑っちゃまうのはあんまり酷ですけど、鏡越しに見えたあの顔は可愛いもんでした。

俺のケツが掘られるのはもちろん嫌でしたが、これで息子の雄が目を覚ますかもしれないねえってね。

といっても、私の方もコッチの経験はないんで、まあ揃って童貞って感じではあったんですがね、いやハッハッハ。

——そんなわけで、私どもは本気の交尾を始めました。

しかしね、最初の一步がえらく時間がかかりました。

私の方から「ゆっくりやれ」とは言ったんですが、それにしては息子はじつくり、しつかり慣らしてきました。

ビビってるわけじゃなくって、必死こいて我慢している風でしたねありや。

がつついてきたくせに、律儀なやつです。慎重に、俺がどうやったら感じるかって考えながら、慣らして、チンポあてがって、また慣らして、つてのを繰り返していました。

なんだかそれ見てたら焦れったくなくなってきちまいましたね、ついに俺はこう言っちゃったんですよ。

「もういい、もう……お前のしたいようにしろ、いいぞ」

それ聞いた瞬間、また息子の顔が変わりましたね。

一瞬の驚き、すぐにギラつき。そこから早かった。

取り出した竿を俺のケツにあてがって、ぐいっと……俺のケツの穴を広げてきました。

「フツ……!!」

俺は思わず唸っちゃいました。さすがに指とは大違い。男のナニが……男の俺に入ろうとしているんですからね、も……先生の教え通り鏡の前じゃなかったら、きっと躊躇っていたかもしれせん。



大昔、新米の頃から上司や先輩に口を酸っぱくして言われておりました。

しかしね、俺は鏡を見て思いました。

ケツを掘られちゃいるが俺は俺のままの顔です。オカマにはなっっちゃあいない。

息子は息子でやっぱり真面目な男のツラをしていました。これなら大丈夫だ、俺が少し我慢していれば……息子はいい男に成長するだろうってね。

……。

ハァー……。

いや失礼。ちょっと思い出しておりますね。

………。なんといいいますか、私はいつも見通しが甘いんです。

いやね、息子は大丈夫だったんです。しかしね、俺のケツのほうがね……。

前立腺……？　ってやつがですね、どうも俺……いや、私は人より敏感だったようです。これは性格の男らしさや、体のゴツさには関係ないようです。個人差とか年齢によって変わってくるだとか。

……それか、息子の竿が私のケツと相性が完璧だったか。

とにかく、息子のチンポが私のケツの奥深くに潜り込んでくるごとに、私は……初めて味わう気持ちよさに、頭の芯がとろけそうな……チンポで味わう気持ちよさとは違う、むずつとするあの……内側からの……あの快感に苛まれ始

めました。

出入りするんですよ、俺の中を……その……ナニがね。

ずるつと内蔵の中を掻き回してくるんで、最初は違和感しかなかったんですがね……なんどもなんども繰り返されていると、どんどん妙な気分になってきます。違和感が刺激になつて、刺激が快感になつて、ついには……ああ、どう考えてもセックスだつて刺激に変わりました。

完全にセックス、雄同士なのに交尾です。

俺、何年ぶりのセックスをしているんだつて感覚が頭の中にぼやーつと浮かんできました。

しかも宗介のやつ、どんどん上達してくるんです。

俺が教えたことを思い出すように、腰使いも、息遣いも、どんだんいっぱしの男になっていくんです。

「あー……ああー……あ、あー……クウツ……」

声を出してないとこらえ切れなくつて、俺は鏡に向かって妙な声を上げ始めました。

グラサンを掛けた男らしい髭の親父が、ケツを掘られて呻いている姿が鏡には写つてます。

まずいです。これはまずいです。

俺は平気のつもりだったから、我慢して息子にケツを貸している……つてつもりだったんです。

ところが、鏡の向こうの俺はどう見ても……チンポで感じ始めてるんです。

気持ちいいのは駄目です。いけません。これじゃあ、俺までホモになっちまっているようなもんです。

息子のホモを治すどころか、親子でホモを始めちゃっているんです。

「待て……ああ……あー……マズイ……まずっ、これは、やばい……」

俺は軽く息子に言いました。

これ以上はちよつとやめねえか、一旦止めねえかってつもりで言いました。

しかしね、息子はこれをまた……勘違い、そう、勘違いしでですね。俺が感じすぎて、ダメダメ言っていると思っちゃまったんですよ。

「……ち、ちがう、そうじゃねえって、ああ……こ、これはマズイんだって、そ、そこ押しつぶされるのは……と、特にマズイんだって」

「そうかそうか、親父はここが駄目なんだな、わかった、わかったよ」

「あ、ああ……わかってねえ、お前わかってねえよ……違う、ああ……なんでそこばっか責めるんだよ、待て、待てよ、違うんだ、ああ……ああ……」

ケツのから来る気持ちよさに俺は完全に参っちゃいました。

鏡を見ると、びっくりするくらい感じている俺の阿呆面が写っています。しかし止めることはできません。息子の方もますます激しくなってきました。

俺を犯す息子の顔と、犯される俺の顔。筋肉で覆われたこの俺が、犯されて勃起したチンポを犬の尾みてえに振っている姿がハッキリ出てます。



体の刺激だけでもキツいつてのに、目で感じる情報も助平が過ぎて……下半身からくる快感と、頭の中でこみ上げる気持ちよさ、両方から板挟みにされちまって、くらっくらになってました。

もう頭の中が、ホモ気持ちよすぎてどうにかなつちまう、つて叫んでました。

「ハァー……ハァー……！！ 出るう……でちまってえ

え、宗介え、ま、待つてくれえ、それ以上俺のケツん中いじくるのやめてくれええ、父ちゃんヤベエんだよお……」

「いいよ、いいよ、親父、やばくなってくれよ」

そう言つて、宗介は俺の一番置くまでズブツと入つてきやがりました。

あー……今思い出してもあれはやばかった。

俺の一番深いトコロまで突いてくる、ガツチガチのあのチンポ。俺のなかのいろんなものが、あのひと突きでもうグニャ！……つて捻じ曲げられたような気分でしたね。

「ああああ……ケツ、ケツ感じる、俺、俺ケツ感じて……ッ。息子の前で、ケツ感じてる顔になつちまってる……おとおお、オオオ……！！！！！」

「すげえ気持ちいいよ、親父ん中最高だ、親父、イッてくれよ、俺のでイッてくれよ！」

「そ、そんな言われたら、マジでイッちまう、俺、マジでイッちまうぞ……！ ああ、お、父ちゃんお前のチンポでイッちまっても、軽蔑しねえかあツ？」

「当たり前だろ！ 親父に惚れきつてるんだから、嬉しいに決まつてるだろ！」



よう。

俺はもちろん「ああ、好きだぞ」「当たり前前だろ、聞くんじゃないねえ」ってな感じで答えてやりました。

そうすると嬉しそうに、アイツが……俺の中でイキました。俺のケツの中に、俺の息子のザー汁がたっぷり入ってくるんです。あつたけえ種が、男の俺の中に入ってくる。俺のケツにたっぷり、孕ませる汁が染み込んでくるんです。あの感触は……もう生涯忘れられねえ。

……アイツがイツたのは、まさに俺が好きだって答えた瞬間だったんですが……、これが可愛いトコロってやつですけど、同時に息子のずる賢さもわかっていただけますかね。なんせ俺はケツを掘られながら、好きだ好きだ……って口にさせられたんですよ。種を仕込まれながら、好きだ。擦

り付けられながら、好きだ。

……そうしていると、まるでケツ掘られるのが好きだ、って言っているような気分にもなってくるんです。

アイツ、今日まで童貞だったくせに、この俺を……荻風櫻を自分好みに仕込み始めたんですよ。なんて生意気で、ずる賢くて、上等な雄でしょうか。

もうね、ケツの中を動く息子のチンポも、俺を後ろから抱く息子の顔も、全部全部好きになっちゃいました。

これじゃあ完全にホモですよ。

でもね、息子を愛している親父として、まさか「お前のチンポなんて嫌いだ」「お前を好きなわけがねえ」なんて言えるはずがありません。だから俺は、あそこではホモになるしかなかったんです。

そのまま何度も何度も、何度も何度も何度も。

——俺は息子の種汁を、ケツに直接受け止めました。

俺がホモを治してやる、ホモっけなんて追い出してやるって思っていたのにね……もう気持ちよすぎて完全にそんな考えなくなっちまってました。

ケツを突かれるたびに、俺の中のホモ嫌いを追い出されちまって……。ね。

「まずい、親子でホモはまずいって……」

そんなわけで大敗北で、それが悔しくって、気がつきやあ俺の口は、負け惜しみを言っていました。

そう……、竿から雄汁をダラダラ垂らすみたいに、口から垂れ流していました。

ところがね、息子はどうもこの一言を重く受け止めたみたいでした。

「ごめんな親父」

なんて言うんですよ。さっきまであんなに楽しそうだったくせに。

「俺、ホモでごめん、親父を苦しめてごめん」  
って、謝るんです。

馬鹿野郎って話ですよ。

俺も息子も大馬鹿です。

苦しいことなんてあるはずねえだろうって。

お前の為を思つてホモを治してやるって、そう考えていただけなんです、俺は。そのお前にこの俺が苦しめられるな

んで、そんな事はあるはずがねえだろうって。

そこから改めて第二ラウンド開始です。正直かなり盛り上がっちゃいました。ありやあね。

……。

俺は息子を叱りつける代わりに、こう言ってやりました。

「宗介、愛してるぞ、お前がホモでも俺あもう構わねえよ」  
って。

ハハハ、アイツは完全に面食らってましたね。

この、不意の愛しているってのは、男はビビりますからね。  
そう言って俺は、自分からケツをアイツのちんぽに押し付けてやりました。

こうなりや形勢逆転です。あいつは気持ちいい言葉と俺の腰使いで、情けないくらいに感じまくってました。



そんなわけで、息子のホモを治す作戦は失敗に終わりました。

でも後悔はありません、なんせ家では気持ちいい思いはできませんし、息子との関係もたつぷり進展しましたから。家庭円満です。

なんの悩みもありません。

……。

ん、じゃあなんで悩み相談なのかと、ああ……大変失礼いたしました。

いえ、家庭には問題はないんです。

では結局の所、私がナニを悩んでいるかと言うとですね。

そう、ここまで私と息子の話をさせていただいたのにはわけがあります。

……今度の連休ですが、私は息子と二人で旅行に行こうと思っているんです。

どこかで親子二人水入らずで気持ちよくリラックスできる場所を……、と探しているんですが、これがなかなか条件が合う場所がなくってですね。

……どなたかご存知ありませんかね？ できればどんなに大声上げてもいいところで。飯がうまいところだと理想です。

クリニックに通われている皆さんにぜひ、お知恵をいただきたいんです。

いや、なかなかいい旅館が見つからなくて、すっかり困っちゃってますよ。

終

父性快善クリニツク 快善前

三分前までは疑っていた。

自分を見つめ直すクリニック、などと聞こえはいいが、ビルの上階の洒落た部屋にあったのは巨大な鏡とカーテンだけだった。

胡散臭い。部署は違うが、警察官としての血は、このクリニックを『詐欺』という分類に入れようとしていた。

「なにが見えますか？」

「なについて、鏡ですかね、かなりデカイ。……あ、そういうことじゃあねえですよ。ええっと、写ってるのは私ってことですか、この場合」

「はい、その『私』とはどんな姿をしていますか？」

「……………。まあ、厳つい男ですね。タップはあるし、ガタイもいいオヤジです。いやこれ、自分で言うのはナカナカ照れくせえもんですな、やっぱり駄目です、俺あこういうの」

荻風櫻はそう言つて早々に鏡から目を離した。

やはり来るべきではなかった。いや、そもそも何故こんなところに来たのだろうか。

動機が定かではない。ふらりと足が向いたのだろうか。同僚がココを語っているのを聞いたのだろうか。父親として悩みすぎてつい弱気な行動にでってしまったのかもしれない。とにかく、こんなふうになにかに頼るなど性に合わない。

「すいやせん、あ……………料金はお支払いしますんで、俺はここらへんで……………」

「荻風さん。わたくし共はけっして……偉そうにあれこれと指図することはいたしません。ただ、ご自身の強さと、弱さと、悩みに向き合っていたたくリニツクなんです」

先生と呼ばれる白衣の男は物腰穏やかに、しかし食い下がって言うてきた。

いずれにせよ胡散臭い場所に来ちまったのは確かだ。

仕方がない、とりあえず最後まで付き合おう。

そう思っていた。三分前までは。

まず部屋が薄暗くなった。

正面の鏡の裏の照明だけがついて、ぼんやりと発光した。

カーテンに遮られて鏡と自分だけが取り残された。

視界が悪くなると、嗅覚や聴覚が鋭くなった。

気がつけばこの部屋には、香ばしい匂いが充満していた。

少しばかり蒸し暑い。汗に匂いが絡みついてきた。

音楽がごく小さく流れていることもわかった。

なんとも言い難い不可思議な重低音だった。

三分前までは、鏡をじつと見つめて………それだけだっ

た。

ナニも考えていなかった。今は違った。

「あなたを見つめ直せば、きっとわかるはずです。今苛立っている問題も、解決の糸口も」

先生？の言葉が、妙にスウと頭に入ってきた。

先まで話していた、ヒョロくて小さな体型の男の言葉とは思えないほど、妙に力強い言葉だ。

まるで、自分自身の喉から出たような、低くよく響く声に聞こえた。

萩風は鏡を見つめた。

眠たげな目をしている自分と目が合った。

それしか見えない。

「あなたの長所は何でしょうか、自分で考えてみましょう」言葉はよく澄んでいた。迷いなく頭の中に染み入るような声だ。

萩風は言われるままに鏡を見つめた。真っ直ぐ見つめただけなのに、鏡の中表情は睨みつけるような鋭い表情になった。

自然とこんな顔になる。

いわゆるマル暴刑事の顔だ。

警察組織の中でも特に荒事に近い組織犯罪対策部の人間として生きてきた男の顔だ。

どんな相手にもまず舐められない体だ。それでいて社会秩序に準じた男の顔をしている。

しかし、この顔と体が、家庭内ではどうだった。

あの女と別れたことに後悔などない。息子のためには正解だった。しかし、結果として息子の宗介には寂しい思いばかりさせてきた。

ついに限界が来たのかもしれない。

受験で苛立つ息子は、事あるごとに自分に……親父である自分に当たるようになった。

そんな息子をどうすればいいかわからない。

ぶん殴って従わせる、なんてことは死んでもしたくない。しかし、じゃあ利口な解決法がだせるほど……自分は家庭の味というものを知らない。

長所。

そんな事言われてもわからなかった。

この逞しい二の腕や、広い肩幅、太い首があったとて、いったいどうやったら息子との関係を修復できる。犯罪者やその予備軍どもと戦い続けてきた人生を、息子との生活にどう活かせばいい。

『俺は、宗介を幸せにしてやりてえんだ』

切実な願いを語ったのは、鏡の向こうの男だった。

いや、発言したのは間違いないが、荻風自身だったのだが、眉をひそめて悲痛に語るその顔は見ず知らずの男のようでもあった。

こと息子のこととなると、こんなにも親父というのは脆くなってしまうのか。荻風は長い人生の中で、初めて己の姿を見た気がした。

「もつと見てみれば、もつと努力すれば、答えが出るかもしれねえ、わかるかもしれねえ」

声がした。

その発言は、はたして萩風自身のものだったか、先生の言葉だったか。或いは、鏡の向こうのもうひとりの男のものだったか。

なんにせよ、萩風は気がつけばワイシャツのボタンを外していた。

このクリニックに来たのは息子のためだ。

それなのにお前は躊躇うのか。帰ろうってのか。なんだ、とんだ口だけ野郎だな。

鏡の向こうの厳しいオヤジが、萩風櫻がそう挑発してくる。片眉を吊り上げて、見下すような、嘲るような顔をしている。ああ、これまで煽ってきた半社会勢力の人間たちは、皆この顔に釣られて尻尾を出したのだと、他人のように感じた。

『お前が息子を愛しているってのは、口先だけか』

「そんなわけがねえ、俺は、俺はそんなもんじゃあねえ」  
萩風は言葉を殴り返すように、胸元からぶちぶちとシャツをかつ開いた。

ぶちぶちとボタンを取れそうな音を出して、肉厚な胸板が露出する。

衣服で閉じ込められていた肉体の圧が蒸気となって磨き上げられた鏡にぶち当たった。鏡面がむわりと白く濁った。

自分の姿に白い陰りが差したかのようで、ひどく不快だった。きつと長々と躊躇っていたからに違いない。さつさと脱いでいれば、汗をかく前ならば、こんな屈辱を感じる必要はなかった。

躊躇うな。急げ。もっと自分を見つめ直して、本当の姿にならなくては。

言葉がどこからか聞こえてくる。

「やってやる、やってやろうじゃねえか」

ここにいるのは自分と、鏡の自分の『独りきり』だ。ならば聞こえるこの声は、自分のものでなくてなんだろうか。

「いや、でも待てよ、これ以上ってなると——」

しかし、下半身に手をかけたところで、萩風は流石に戸惑った。

鏡に写っているのは、今にも下着ごと脱ぎ捨てようとして

いる蔽つい男だ。それも、見てくれだけではわからないかもしれないが警察官だ。

鏡の向こうの男はためらっている。

当たり前だ。

ここは風呂でもなければ、自宅でもない。

そんな場所で、靴だけ残して素っ裸になれというのか。とんだ変態警官ではないか。

——。

——しかし、そんなことでいいのだろうか。

息子との問題を解決するためにここに来た。

そのためには自分を見つめ直さなくてはならない。

つまり、邪魔な衣服は全部脱ぎ捨て無くってはならない。

「そうだ、鏡の向こうの男が先に裸になっただらどうする。またあの顔で、自分を煽ってくるかもしれない。家族への愛の強さを証明して自慢してくるかもしれない。」

「そんな屈辱、この荻風櫻が耐えられるか。」

「負けてたまるか。」

「俺の家族への愛が……たったひとりの息子への愛が、誰かに負けるなどあつていいのか。」

「負けてたまるか」

二度目は声に出た。

荻風櫻はためらいを捨て、下着ごと服を脱ぎ捨てた。

終わってみればなんてことはない。

「裸を晒す男は、変態ではない。息子のために戦う一人の戦士だ。」

体毛の胸板。

割れた腹筋。

巖つい髭面。

肉厚な太腿。

そして皮をかぶったふてぶてしい肉棒。

もぞりと身じろいだのは、後悔したからではない。ただ、腰の居心地だけが悪かったからだ。鍛え抜かれた体の中で、ただ一点だけ鍛えられていない場所がある。

銭湯でも、職場でも、常に見栄剥きしてから脱ぐくせに、今日はそれも忘れて裸になってしまった。まったく皮の剥けていない一物をぶら下げて堂々とするのは、さすがに居心地が悪かった。

しかし目を背けたり、収めるわけにはいかない。

見つめ直さなくては。

そして息子と、家庭と、自分自身を救ってやらねば。

……そうだ、裸になったから思い出してきた。自慢はなにも筋肉だけではない。この二の腕の火傷痕もそうだ。母親と会えなくなつてぐずる息子に、甘いホットケーキを作つてやろうとして、とんだヘタをこいて火傷をした。もう誰にもわからないようになうつすらとした皮膚の厚みだけが覚えてる。

うまくいかずとも、そうやって生きてきた。

俺の腕、俺の筋肉、俺の体。

息子のための俺のガタイ。そうだ、これが役に立たないわけがない。

「見えてきたぞ、俺の強さ」

『ああそうだ』

鏡の向こうの男が頷く。

「すべて息子のためだった。この筋肉の膨らみ一つ残らず、家族への愛の象徴だ」

『そうやって働いてきたんだ、間違いない』

「だから俺は、これを活かしゃあいいって話だ」

『そう、このチンポが特にそうだ』

「あ？」

待て、何を言っている。

たしかに全身、そうだ。だが、ここはいくらなんでも別じやねえか。

見れば、鏡の向こうの男も驚いた顔をしている。

しかし確かに、下半身のナニをさす言葉が聞こえた。幻聴

ではない。聞こえた。

……。

荻風は自分の股にぶら下がる竿を手に持った。

萎えた状態でもずっしりと太い、大きく、立派だ。しかし

そこには、先端まで隠れる分厚い包皮に包まれている。

昔から包茎だったが……しかし、結婚前はここまで皮は長く分厚くはなかった。

「……………。……ああ、ああ、そうだ……………」

思い出した。どうしてこうなったか。

いつも繰り返し、この皮を使ってシコシコと一人、オナニーをしていたからだ。

あれだけ女好きだった自分が、結婚し、離婚し、息子を抱えてからずっと、一度も使ってこなかったのだ。

仕事を優先、家族を優先。家で、職場で、時には公園の便所で、一人で隠れてシコシコとしていた。

時にはなにかにツッコみたかったが、それも右手で我慢した。

余った皮は、息子への愛の象徴だ。

男としての忍耐の証だ。

真面目な男の勲章だ。

荻風は鏡に向けて、鈴口を向けるようにして皮を剥いた。皮を剥いてみると、中から重たげな亀頭が顔を出した。もう何年も女を味わっていない、自分の掌とオナホールの中だけで射精してきた辛抱強い相棒だ。

そんな亀頭が、鏡合わせに2つ、びったりとへばりついた。

「俺は何年も」

「何年もこうして」

「息子のために我慢してきた」

「ああ、ああ、何百回もシコってきた」

「こうやって、自分で、皮使って、たまには、擦りつけて

……」

鏡に向かってこすり付けてみる。

気持ち良かった。どろりと甘い刺激がチンポからこみ上げてくる。それに、一人でするのは親父にとつて名誉なことだとおもうと、ますます気持ちよかった。

こんな恥ずかしいことも、みっともねえことも、息子のためなら何でもできる。

鏡に映る自分を打倒する。

過去の自分を乗り越える。

アイツの父親は俺ひとりきりなんだ。

「そうだ、大丈夫だ、お、俺あ……もちろん、宗介え……お前のことをっ……」

「俺あできるぞ、こうやってシコシコしてきたみたいに」

「全部、全部任せておけ、父ちゃんに任せておけよ、なあ……」

亀頭を鏡に押し当てながら、荻風は包茎チンポをヌチュヌチュと扱き始めた。

お前がどんなに苛立ってようが、受け止めて、我慢してやる。お前のストレスなんて全部受け止めてやる。このでか

い体で受け止めて、溜まったもんは……こうやって、シコシコで気持ちよくなって解消してやる。

「シコシコしてやる、俺が、お前の分まで、シコシコしてやるからなあ……」

萩風は虚ろな目で、しかし得意げに笑ってみせた。

「そうだ、それだけじゃねえ、この俺のオナテクで、お前のことも……気持ちよくしてやる」

「俺の右手は絶品だぞ、任せろよお、父ちゃんに任せろよお……」

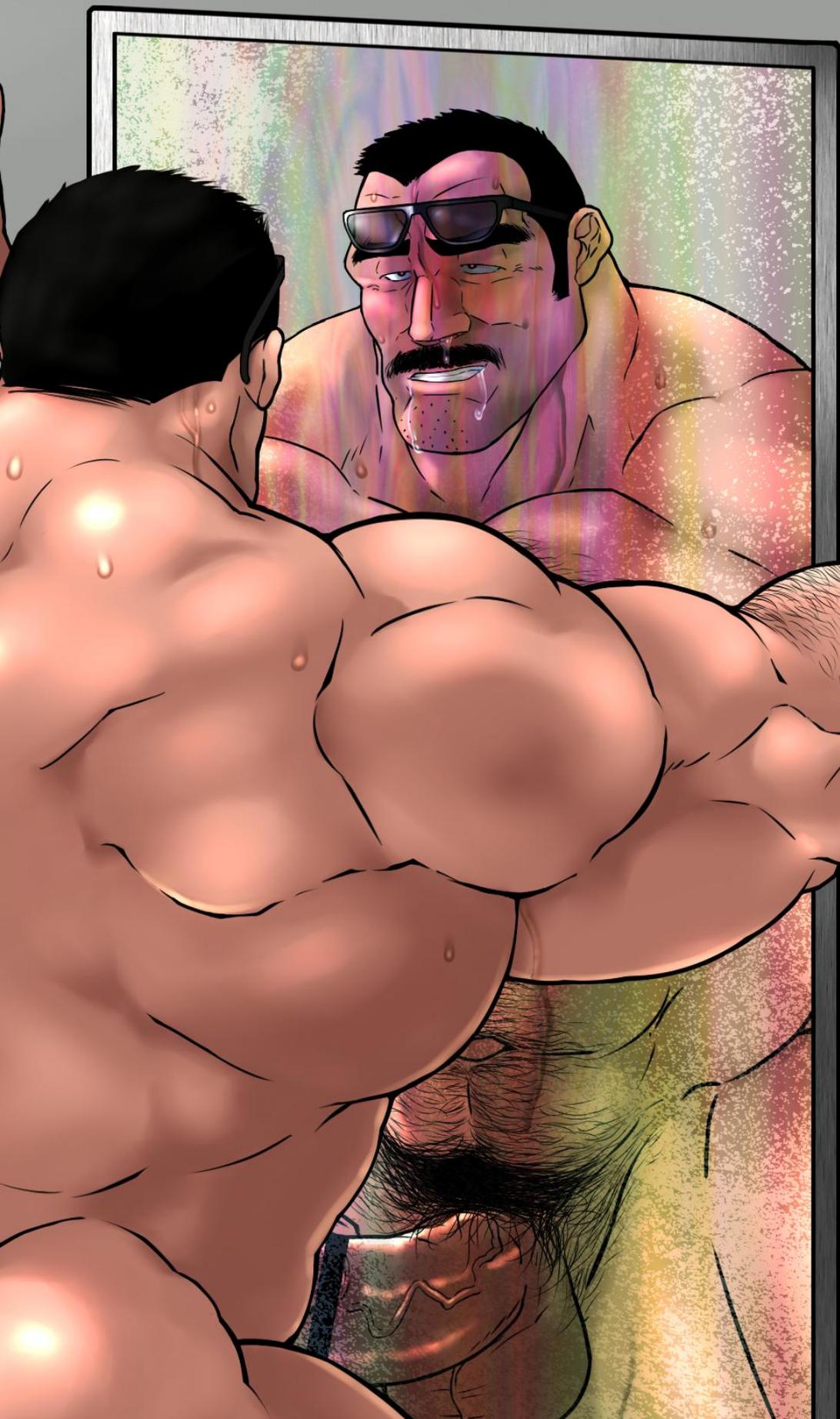
シコリまくったこの技術、それは磨き上げた息子への愛の賜物だ。

これが俺の生き様なんだ。だから、全部活かしてお前を立派な男にしてやろう。

「ああ、気持ちいい、ハア、ハア、すげえ、気持ちいい、み、見ろよおこの顔、すげえ顔だぜ、俺みたいな厳つい親父が、こんな気持ちいい顔になっちゃうようなテクなんだなあ……」

鏡の寸前で喋ったからか、声が反射して二重に聞こえた。

「ハア、ハア、こ、こんなに気持ちいいんだから、おまえもきつと……父ちゃんのオナテクだいつすきになるぜええ……あああ、……イイ……たまんねえ……腰とろけちまう……」



鏡を見て、この余った皮を見る度、父親としての誇りと尊厳を思い出せる。

もう隠さねえ、イラつくことなんてひとつもない。

「気持ちよすぎて……もう、もう出る……出ちまう……  
ああ……あ……ハアツ……！！俺のオナテクでイカされ  
ちまうう……俺の延び皮でイカされちまうううう！！あ  
ああ、俺こんな、あああ、すげえ、右手でイク、右手でイ  
クイクツ、待つてろよおお今イクからなああ宗介ええええ  
……！！！」

萩風は息子の名を大声で叫び、激しく皮を前後させた。

父親としての誇りを胸に感じ、雄としての快感を肉棒に感

じ、自分が生まれ変わる喜びを脳に感じ、最高の気分で大  
量の精液を吐き出した。

「先生、どうもありがとうございました、本当にスッキリ  
しました」

「ええ、そうでしょう、そうでしょう」

「始めは正直疑ってかかってたんですが、こんなに素晴ら  
しいものとは思いませんでした」

「わたくし共はなにもしておりません、すべて萩風さんの  
努力と、人間性と、その肉体の賜物です。……ですが、ま  
たなにか新しいお悩みに直面されましたら、ぜひ当クリニ  
ックをご利用ください」

「ええ、そうさせていただきます、ハイ、是非とも」

そうして萩風は清々しい気持ちでクリニックを後にした。

終

そして数カ月間は戻ってこなかった。

しかし、受験が終わる冬が過ぎ、春が過ぎ……夏の頃、萩風櫻は血相を変えて戻ってくることとなった。

「俺の息子が、……息子が、ホモだっていうんです。お、俺あ、一体どうしたらいいんですか」

あとがき

この度は『父性快善クリニック』のご購入、ご拝読、ありがとうございます。

逞しい男、兄貴、親父が男性性をそのままに受けをする、そんな要素が書きたいという願望と、でも乱れるところも見たいという欲望が合わさって、過去使ってきた催眠要素を取ってこのような作品となりました。

雄受け（オスウケ）

愛情があるからしっかり表現するけど、不器用で奇妙な格好になる親父さんつてもものすごく魅力的だと思います。

そんな主張に少しでも共感いただけれたら幸いです。

サークル づけ井

文章 づけかつ

挿絵 非天丸

連絡、感想先 Twitter <https://twitter.com/dukekatsu>

以下の行為はご遠慮ください。

I wholly prohibit the following acts concerning this book:

이하의 행위는 삼가 주세요

请避免以下行为。

- ウェブサイトや各種SNS上にアップロードする
- Uploading on website or any other social media.
- 각종 웹사이트나 SNS에 업로드
- 在网站和各种SNS上传
- 転売
- Resale
- (개인 판매용 블로그 등에서) 재판매
- 转售